

〔一面より〕
 授業も早々と切りあげて、夕方市駅に全校生徒を集めて、同窓会や相撲部先輩方や一般市民の皆さん、二千人をこす人波がホームにあふれ、祝勝のノボリ、校旗、クラス別の大きな旗、毎日新聞の小旗、ちようちんを持って二十二年ぶりの喜びに酔って出迎えて下さった。

「ワー」と歓声がどよめく中、南海電車が午後四時十分プラットフォームにすべり込んだ。

内藤俊彦校長を先頭に、野田聖太郎部長以下六名の

部員が、真紅の大優勝旗、横綱の練精、カップ、タテを持って一列に整列、再び祝福の嵐が周囲を圧して、私達は新たな感激を目をうるませました。

県知事、市長、県教育長、他多数の方々よりお祝の言葉を授けました。

万才三唱のあと、夕やみせまる晩秋、市駅より放送車先導のもとオープンカー(進駐軍中型ジープ)に学

昔話をするのは老化現象の最たるものだと先輩から聞いていたもの、自分も昔話を聞かれる年令になった。とはいえ昭和二年生で昭和十五年和商入学のレッキとした和商族である。

昭和十五年といえ、地球は戦争の暗雲に覆われていた年で既にヨーロッパではドイツが戦争を始めて居り快進撃中。日本も大東亜共栄圏(経済支配)確立に向けて一億一心・火の玉の時代といわれていた。

お陰で和商の入試は筆記試験が廃止され、口頭試問(面接試験)に代った。入学生、百人余り四

十一kmの道のりを歩いて約四時間ほどかけて応援歌をうたいながら学校にたどりついた。学校ではグラウンドの中央には山のように積まれた材木に火がつけられて、夜空をこがさんばかりの大ファイヤーストームをくりひろげ、校歌や応援歌、三三七拍子で全校一致団結全校挙ってご支援、祝福して下さったこと、今も私の脳裏に強く焼きついて一生忘れることの出来ない思い出として大切にしております。

特に相撲に深いご理解をいただいた、内藤校長は「和商の復興は相撲か



世界大戦という 動乱期の和商時代

旧三十九期 玉井 一郎

一学級の編成は五十名、成績が二番の者が級長で、一番の者が副級長に、校長先生から任命され、クラスの統率の責任を持たされた。また五年生より各クラスに一名宛、指導生という監督が配属され、下級生の指導に当たった。現在の学級委員制とは全くことなっていた。

当時の学制は小六より中等学校、普通は五年に進んだ。和商を希望し受験を許されるのは小学校での成績が上位一割以内だった。

世界大戦に入り和商からも予科練等軍へ進む者も続出し、在校生は農繁期に農家へ稲刈り麦刈りに、夏休みには軍馬の食糧干草作業へと、勤労奉仕への出勤と、戦争の深まりと共に軍事教練と勤

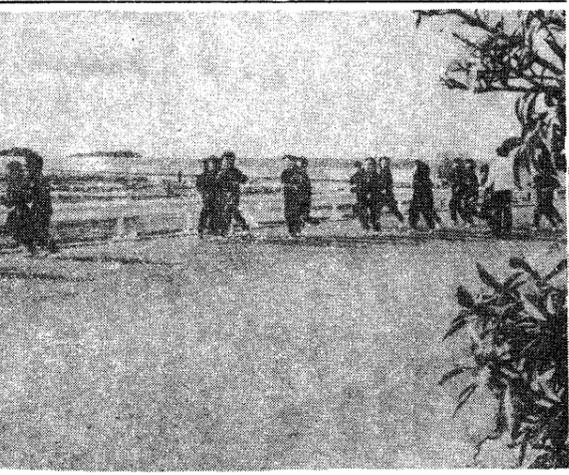
ら」と開校三年目にして達成したことについて「多くの先輩諸兄の指導、後援によって和商独自の練習法と和商魂が受け継がれ、着々と実力を養ってきたあらゆる条件の一致にある」とのべられておりました。

生徒会、学校あげての応援、歓迎、祝福、とくに当時の若い相撲部先輩諸兄や生徒会役員たちが先頭に立つて実現された市内パレード、ちようちん行列は、和商高健児の意気でもありました。

翌年の二十九年大会も全校生徒、同窓会、PTA等の二千人をこす大応援団と



(左から筆者・浜野・中尾各選手)



母校マラソン大会(南港周辺) 59.2.7実施

して府立体育会館にかけつけ館内を大声援でゆるがし、そのお蔭で団体、個人共に二連覇を達成することが出来ました。

そしてこのような偉業達成のために、多くの方々のご指導とご支援の賜があったこと、今もハッキリ頭

特に昭和二十六年和商復活かから昭和四十九年までの

「そろばんが好きだから和商へ行こう」こんな簡単な理由で母校の門をくぐったのが昭和四十九年、創立七十周年の年でした。そして十年たった今年、創立八十周年の年にこうして在学中の思い出を語れることをとてもうれしく思います。

そしてこのような偉業達成のために、多くの方々のご指導とご支援の賜があったこと、今もハッキリ頭

昭和58年度卒業生……新第33期評議員決まる

昭和五十八年度卒業生による同窓会役員はこのたび次のとおり決定されました。

理事
 井原 一江 海部 下津町 下津西ノ浦一五六、青木隆幸 和市、新中通四

丁目九
 福田富男 和市、西釘貫町一、島本武仁 和市、川辺六二、岩橋良昇 和市、堀西二丁目八二三、津田栄治 和

中、小松原通り五二三、岸正純 和市、東長町七丁目三、児玉泰彦 和市、楠本二九〇九、松本美和 和市、松江東二丁目七、四三、清水弘和 和市、南雑賀町一九番地、太田佳孝 和市、岡崎団地二四、土山純子 和市、和歌浦中二丁目一〇一四

珠算に熱中したあの頃

新二十六期 川端 幸彦

「パチパチパチ……」静かな教室のなかでソロパンの音だけが鳴り響いていく。学校でのいやなことや悩みごとがソロパンの珠一つ弾くことに消えていくようで、とても気持ちのいいものでした。その快感が珠算部をつづけさせた理由の一つになっていました。

掛け算割り算、見取り算、暗算、応用計算、平方等、何種類もの種目があり、各種目十分から二十分ですので一通り練習するのがやっとです。それをカバするのが下校時でした。これは、先輩から教わった練習方法で、車のナンバープレートが問題になるわけですから、走っている車のナンバーを足したり、掛けたり、バス窓から車を見ながら帰ったものでした。

また、楽しい思い出の一つに珠算部後援会とのリク

間、「自分の生活もかえりみず全く無報酬で母校相撲部を指導され「選手づく

りの名人」とまでいわれた村上昌彦先輩(旧四十四期)がおいでであったことは忘

れはなりません。私は今なお先輩に対して感謝の念でいっぱいです。

「そろばんが好きだから和商へ行こう」こんな簡単な理由で母校の門をくぐったのが昭和四十九年、創立七十周年の年でした。そして十年たった今年、創立八十周年の年にこうして在学中の思い出を語れることをとてもうれしく思います。

そしてこのような偉業達成のために、多くの方々のご指導とご支援の賜があったこと、今もハッキリ頭